

二〇一五年度(平成二七年度)

中学校第一回

入学試験問題

国語

注意

左のことをよく読んで、解答用紙に解答を書きなさい。

(ア) まず初めに、受験番号と氏名を解答用紙(一枚)に書きなさい。

(イ) 問題をよく読んで、解答用紙のきめられた場所に解答を書きなさい。

(問題用紙に解答しても無効です)

(ウ) 時間は五〇分です。

(エ) この問題用紙は持ち帰ることはできません。試験終了後、回収します。

※答えは、別紙の解答らんに書き入れなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ここまでのあらすじ

第二次世界大戦直後のオランダ。戦争は終わったが、ビムやピーターといった少年の心に、戦争はまだ濃く影を落としている。

「あんなちっちゃい男の子たちが、」と、村の女の人たちは、裏庭の垣根越しや、お店のカウンターなどで、繰りかえし、繰りかえしうわさします——「あんなちっちゃい子どもたちが、まったく、よくやったもんだよ。」

けれども、ふたりの少年たちは、じぶんたちのまえで、じぶんたちの善行の話をされると、すっかりはにかんでしまうのです。そして、どこかにいつてしまうので、あとにのこった女たちは、いったい、どうしたんだろうとふしぎに思うのでした。

①けれども、ぬくめのない百姓や、我利我利者の百姓を相手に物々交換をしたり、秘密の新聞を配って歩く「飢餓旅行」も、もつとまえ、ヤンやヤーブがいっしょに働いていたところにやった仕事にくらべれば、物のかずでもありませんでした。一九四三年にはビムやピーターは、地下にもぐってドイツに対する抵抗運動をしていた人たちに連絡をしたり、見張りに立ったり、おとなの人たちがサボタージュをしているとき、ドイツ軍の衛兵の気をそらせるとか、また、ユダヤの人たちを安全なところまで案内してやるとか、というような任務を負わされていたのです。また、それからすこしすると、十四歳から四十歳までの男たちを、なんとか、奴隷のような強制労働からまぬがれさせようとして、その人たちのために、やはり同じようなことをやったのでした。その当時は、こうふんにあふれていた時代でした。でも、たしかに悪いこうふんでした。——おとうさんのいっ

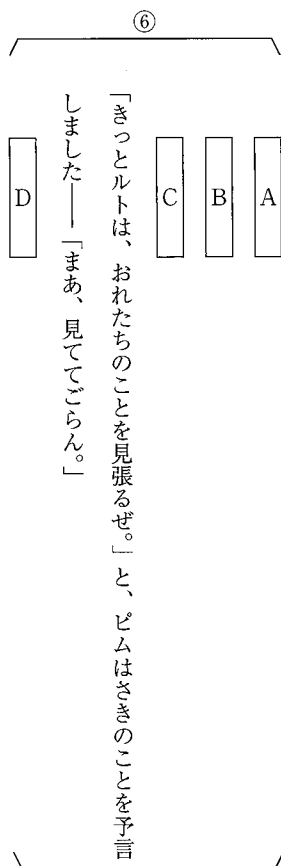
す。いや、忘れるもんか。ぼくは忘れない。こうしてビムとピーターは、しばらくくうろう歩きまわって、とうとう、野原でウサギを捕えることをおぼえたのです。これはまた、^④わくわくするような遊びでした。ふたりはウサギをヘンク・アルデヴァールのもとにもって行って売ります。すると、まだ若い農夫のヘンクが、こんどはそれを闇市にもって行って、お金をしこたまもうけるのです。子どもたちが、死んだウサギを一びきもっていくたびに、アルデヴァールは小さな帳面にその金額を記入するのです。ふたりは来年、そのお金をもらって、それでイギリスに旅行する計画をたてていました。ふたりは旅行をしてひろい世界を見たかったのです。そうすることは、当時のオランダの多くの人たちのねがいでした。オランダ人は、それまでかごの鳥のような生活をしてきました。けれど、いまはもうドイツ軍はいつてしまいい、かごの戸はあけられました。そして、人びとは、なんとかして外に飛び出し、世界を見ることができたら……、オランダの土地からはなれることができた……と思っていました。

ビムは、おとうさんがウサギの取引に賛成しないだろうということを、よく知っていました。オランダの子どもは、たとえば、アメリカの少年が新聞を売ったりしてお金をもうけるように、小遣いかせぎをするようなことは、するものじゃないと思われていました。オランダでは、少年が、学校を卒業しないうちにお金をかせぐことは、けつてありませんでした。たぶん、おとうさんも、ビムが休暇の間に何か仕事をして、何ギルダーか手に入れるということにまで、反対はしないでしょが、ウサギを殺して闇ブローカーに売るなんてやり方には、むしろ反対するにきまっています。ビムにはそのことがわかっていて、どうも妙な気分になるのです。ときどき、家にいても、じぶんだけよそからきた者のような気がして、このごろでは、おとうさんの顔も、まともに見られないようになってきました。ところでは、いまではルトもそのことに気がついていました。ルトは、とにかく、わなの一件は知っています。そして、こういうことに対しては、とて

たのは、こういう一切のことについてでした。また、ある面では、それがどんなに悪いことだったかということでした。まったく、ビムくらの年ごろの少年には経験してもらいたくない生活でした。けれども、おとうさんは、戦争もすっかり終わってしまったいま、ビムがこんなに強く感じていること——生活がどんなに退屈で平凡に思われるかということ——については何もいっていませんでした。きゆうにまた子どもに逆もどりして、それ以上のものとは思ってもらえないのです。これをやりなさい、あれをやっちゃいけません、学校だ、勉強だ、ごはんのまえには手を洗いなさい、首と耳を洗っていらつしやい。そうです、考えてもごらんなさい、いきなりきゆうに生活はドイツ軍の占領以前にきりかえられて、それまで、りっぱに一人まえのおとななみにとりあつかわれていたことを忘れてしまえということです。もういまでは、おとなたちにひまができて、子どもたちのせわをやいたり、子どもたちの毎日の家庭でのこまごました仕事のことから、学校の勉強のことまで気をつけるのです。

「遊戯なんかしたって、何がおもしろいんだ。」と、ビムは考えるのでした。いまさら逆もどりして、あんなにいろいろ世の中のじつさいを見てきた何年かの経験を忘れようたつて無理です。ビムはよくピーターと、そういうことを、ブンブンしたり、ふんがいたりして、議論するのです。ドイツの奴らに対する憎しみと軽べつの念をおちまけることさえ、いけないといわれるのです。おとうさんやおかあさんが、そういうことを、もういやだと思っているということは、ビムも知っていました。「戦争はもうすつかり終わったんだよ。」と、おとうさんはいいます。そう口でいうのは、やさしいことです。けれども、ドイツ人は、にいさんのヤンやおおぜいの人たちを殺したのです。ドイツ人は、われわれを飢えさせて、^⑤女子どもが道ばたでバタバタと倒れていったじゃありませんか。そういうありさまをぼくたちはじぶんの目で何度も見たんじゃないか。それなのにぼくたちは、それを忘れて、おまわりさんごっこをしなければならぬというので

も強情なのです。ルトは、じぶんがあくまでも正直ですから、ほかの人もそうでなければいけないと思ひこんでいました。ビムのことをいつけはしないでしょうが、何かほかの手段を使って、ビムにあのことを止めさせるでしょう。



ビムは肩をすくめてみせました。「そんなことおれが知るもんか。きのう、ウサギを一びきつかまえたんだが、まだ野原においてある。とにかくいつて、そいつを取つてこようや。」

そこで、ふたりは野原のくぼみにいつてみました。低くたれこめた灰色の空から、また雨が降り出していました。ふたりはだまっただままでした。ビムはズボンのポケットに両手をつこんで、じつと考えこんでいるようすでした。ときどき、頭をもちあげ、いやな考えを追いはらおうとするように、口笛を吹きましたが、やがてまた目を足もとにおとして考えこんでしまうのでした。時おりピーターは、ちらりちらりとビムのほうをながめ、何かいい出すのを待っていました。それにしても、あんまりしゃべることもないのだということは、ピーターも気がついていました。ピーターは、こんな仕事をはじめるんじゃないかと後悔していました。ふたりが例の坂の下までいつてみると、あのウサギはなくなっていました。ウサギをおいた場所はちゃんとおぼえていたのですけれど、それでもビムは、しばらくあちこちさがしてみました。

「きみ、夢でもみたんだろう。」とピーターがいうと、思いがけなく、ビムがきゆうにピーターめがけてむきなりました。ピーターはひょいとビムのからだをさ

けて、「まあ、待てよ。」と、すっかりびっくりしてさげました。

「じゃ、よけいなお世話かいするな。」

「うん、わかった、わかった。そう、おこるなよ。だけど、だれがもってっちゃったんだと思う?」

「1 見つけてやるからな。」と、ビムはいつて、いらだたしげにポケットから針金を引き取り出すと、またべつのわなをつくりはじめました。

ピーターはビムのやることを、どうにもわけがわからないという顔つきで見えていました。

「ほんとに、これをつづけていくつもりなのかい?」と、ピーターは、とうとうしまいに、おずおずとたずねました。ビムがカットとなって ⑦ の見さかいもなくついているんだと、ピーターは感じていたからです。

2 案のじよう、ビムはしゃがんだままこつちをむいて、どなりつけました。「帰っちゃえ、おまえなんか! おれひとりでやる! さあ、とつとといっつまえよ。ルトにいつてこい。何うろうろしてるんだ!」

そこで、ピーターは、半分は腹立たしく、半分かなしく思いながら、そこを去りました。いつそ「レヴェル・ランド」にいつて、ビムのすることがどんなにへんだったかをルトにいつてやろうか——そんなことさえちよつとピーターは考えました。でもつぎの瞬間には、そんな考えは、バカなことだと思ひ返しました。ピーターはおしゃべりではありませんし、それに、そんなことが、どつちみち、なんになるでしょう。まして、ルトはじぶんたちの親分でもないし……とピーターは考えました。これは、ルトの知ったことではないのです。ふたりがウサギ捕りをやるのが、ルトには承知できないというなら、それは、 3 お気のどくさまというだけのことです。夕方、ビムは、ピーターの家へやつてくるだろうし、ふたりとも、もうあのことについては、何もいわないでしょう。ピーターには、 4 わかっていました。まえにも、ふたりはけんかをしたことが

問三 — 部③、なぜ「戦争もすっかり終わってしまったいま」、生活が「退屈で平凡に思われる」のですか、その理由として次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

ア 兄や多くの人々が殺され、女子どもが飢えて倒れていった怒りや悲しみのため、まだ何もする気がおきないから。

イ 抵抗運動の人たちを助けるなど、大人なみに危険なことをしていたので、戦争中はこうふんにあふれていたから。

ウ 平和にはなったが、街はまだ壊れたままであり、戦争以前にはあった、おいしい料理や遊び道具はなかったから。

エ 戦争中は、生きるために食べ物確保するだけで精一杯で、生活が退屈か平凡かを考えるゆとりはなかったから。

問四 — 部④、ウサギを捕まえることが「わくわくするような遊び」だったのはなぜですか、説明しなさい。

問五 — 部⑤「かこの鳥のような生活」とはどういうことですか、その説明として次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

ア 国土が狭いことにたえなければいけない、オランダでの生活のこと。
イ お金もうけをしてはいけない、オランダの子どものたちの生活のこと。
ウ オランダ復興に全力をそそぐため、他のことができない生活のこと。
エ ドイツ軍に支配され、見張られていた、全く自由のない生活のこと。

あります。あんなことは、たいしたことではないのです。

*1 サボタージュ 仕事をするふりをしながら、実際には仕事の効率を下げていること。
ここでは侵略軍に抵抗するためにやっている。

*2 強制労働 働く人の意思を無視して、無理に働かせること。

*3 ギルダー オランダの貨幣。一ギルダーは一ドル。

*4 ルト ビムの姉。

(「あらしのあと」ドラ・ド・ヨンク作)

問一 — 部①「ぬけめのない百姓や、我利我利亡者の百姓を相手に物々交換をしたり、秘密の新聞を配って歩く『飢餓旅行』」はどのような評価を受けたか、それがわかる表現(漢字二文字)を書き抜きなさい。

問二 — 部②「やはり同じようなことをやったのでした」とはどういうことですか、その説明として次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

ア 飢えている人を救うため、食べ物なかなか分けようと思ひない百姓たち相手に、物々交換したこと。

イ おとなたちがサボタージュをしている時に、ばれないように、ドイツ軍の衛兵の気をそらしたこと。

ウ 自分たち子供たちも、大人たちと一緒に防空ごうをほり、ドイツ軍に対して、抵抗運動をしたこと。

エ 危険や空腹と戦いながら、なるべく広く多くの人々に「秘密の新聞」を配って歩く旅行をしたこと。

問六 ⑥「」の中の A 〽 D に、次の選択肢ア～エを正しくあてはめて、文章を完成させなさい。

ア 「ばかなことをいうない。」と、ビムがいました。そういわれてピーターは黙ってしまいました。ルトにそんなことを頼むなんてできっこないとは、ピーターも知っていたからです。

イ 「じゃあおれたち、どうすりゃいいんだい?」

ウ 「ふざけてなんかいられないぜ。」と、ビムはつぎの日の午後、ピーターにいました。「ルトにばれちゃったんだ——てえことは、おれたち、ちよつと身動きできなくなったってことだよ。」

エ 「ルトの知ったこつちやないじゃないか。」と、ピーターは抗議したものの、ビムのいうとおりだとはわかっていました。「ルトをつれておいでよ。」と、ピーターは申し出ました。「手つだつてもらつて、わけまえをやるうや。」

問七 ⑦ に最もあてはまる言葉を、いいまわしに注意して、次の中から一つ選び、答えなさい。

ア 善後 イ 左右 ウ 前後 エ 上下

問八 — 部⑧、ピーターが「半分は腹立たしく、半分かなしく思」ったのはなぜですか、六十字以内で説明しなさい(句読点ふくむ)。

問九 ― 部⑨「あんなことは、たいしたことではないです」と思えるのはなぜですか、その理由として次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

アルトはじぶんたちの親分ではないので、ウサギを捕り続けるかどうかはじぶんたちの問題でルトの知ったことではないから。
イ タ方にジムがやってくるけれども、お互いまだ怒っているの、何もいわないという根くらべが続くという予測がつくから。
ウ ジムはカッとなっただけで、戦争中から色々なことを乗り越えてきた二人の友情がゆらぐことはないという自信があるから。
エ ウサギを捕るのはわくわくするような遊びではあるけれども、たかが遊びに過ぎないので、簡単にやめることができるから。

問十 本文中の 1 4 にあてはまる言葉として、最も適切な組み合わせを、次の中から一つ選び、答えなさい。

ア	1	ちゃんと	2	きつと	3	すると	4	まったく
イ	1	すると	2	まったく	3	ちゃんと	4	きつと
ウ	1	まったく	2	ちゃんと	3	きつと	4	すると
エ	1	きつと	2	すると	3	まったく	4	ちゃんと

問十一 ― 部 a d の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

a	任務	b	占領	c	強情	d	口笛
---	----	---	----	---	----	---	----

人間には死んでから自分がどうなるか、まったくわからないからだ。そして、人間は、自分の知らないことを前にして、こわさを感じる。昔の迷信ぶかい人たちの、闇を怖れたその度合は、今の人間とくらべて、ずっと大きかったにちがいない。そう考えをすすめていくと、ぼくは、はじめのところで、「おぼけはこわい」といったが、実をいうと、「こわいから、おぼけが出る」のだということがわかる。こわさが、人間の想像力にうませたものが、おぼけなのだ。おぼけは、空想力の産物なのである。

やれやれ、ここで、君たちは、ぼくがなぜおぼけの話などをはじめたのか、やっとなかりかけたのではなからうかと思う。ぼくは、こわさという人間の持つ感情について、君たちに話したかったのだ。こわさは、こころの働きのひとつだし、しかも、非常に大きな意味を持った働きのひとつなのである。

そこで、この、こわさを入口にして、こころの世界の中にはいついていてみよう。学校に行くとき、左は墓地、右は森という道を通らなければならぬ。しかし、朝、友だちがおおせい通るときだったら、なんにも感じない。夜になって、そこを通らねばならないと、君は、いやーな感じがしてくる。こわさが、こころの底から浮かびあがってくるのを感じる。そのとき、だれかがいっしょについてきてくれることになる、君に元気が出てくる。だれか知った人間がいることで、こわさが減る。

歩いてゆくと、こわいことはこわいが、

⑤

知らない人でも、何もなくて、すれちがって遠くに行ってしまうと、こわさは、うすらぐ。

こうやって、いったい、どういう時にこわさが増し、どういう時にこわさが減るのかを考えていくと、いろいろなことがわかってくるだろう。

自分のまわりに、自分がよく知っているものがいれば、人間はあまりこわさを

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どこの国でも、おぼけは夜に出る。それも共通しているところだといえるだろう。まっぴるま、日当たりに出てきて昼寝しているおぼけはいない。そんな話を聞いても、ぞーっとしない。おぼけが出るのは、夜の十二時を過ぎたころが多い。そして、夜明けが近づくと、あたふたと消え去る。いちばんどりの声を聞くと、おぼけは、あわてはじめる。おぼけのおそれているのは朝だ。太陽がのぼってき、明るい光がさし、地上から暗闇を消してしまふことだ。

おぼけは、なぜ夜にだけ出るのだろうと考えると、答えを出すのがなかなかむずかしいが、どうして昼間に出不出ないのかと考えれば、問題を解くかぎ、がみつか。おぼけは、明るみに出てきて、正体がばれるのがこわいのだ。①「ゆうれいの正体みたり枯尾花」ということわざがあるのを知っているだろう。夜、ゆうれいだとかわがったものが、昼間みたらじつは枯れすすきだった。ゆうれいの正体なんて、そんなものだということわざだ。

それと同時に、人間が月にチャクリクして歩きまわり、証拠に月の石を持って来るような時代になると、おぼけは出にくくなる。文明は、人間に光のようなものをもたらすといえる。つまり、光と文明とは似かよったところがある。それは何だろう。人間は、自分の知っているものには、こわさを感じない。世の中に不思議なゲンショウも、どうしてそれが起るかが、はつきりと説明がつくと、こわさを感じなくなる。

たとえば、君たちは、おぼけなんか、ぜったいに世の中にいないと信じていても、まったく、闇につつまれた墓地を平気で歩けるだろうか。なんとなく、薄気味わるいものを感じないだろうか。夜、まっくらなところで、便所に起きるのがこわいと思ったことは、ないだろうか。

闇は、それだけで、ぼくたちにこわさを感じさせる。そして、そこが墓地だったらもつとこわい。というのは、そこに死んだ人たちが埋められているのだが、感じない。見知らぬものにカコまれていると、なんとなく落ちつかない感じがする。夜になると、自分のよく知っているものも見えなくなり、なんだか見知らぬもののように見えてくる。こんなときに、人間はこわさを感じる。そして、太陽が出てきて、また見知った世界を見ることができるようになると、こわさは消えてゆく。

夜でなくとも、まっくらな地下室や洞窟などの暗くて何があるかわからないところもこわいし、また、知った人がひとりもない、見知らぬ土地もなんとなくこわい。そして、このこわさに人間を向きあわせて、元気をださせ、勇気を出させるのが、いっしょにいてくれる自分のよく知った人間だ。暗闇の中にいるとき、おとうさんやおかあさんがいっしょにいてくれるれば、こわさが少なくなる。手を握っていてもらうか、声をかけていてもらえば、もつとこわくない。そのことから、信頼のできる人間の身近な存在が、こわさと反対の作用を持っていることがわかったらう。逆に考えれば、暗闇がこわいというけれども、ひとりぼっちのさびしさは、そのこわさを、さらに増すのだということが出来る。

君が、いたずらな友だちとおおせいで、おぼけ屋敷を探検するつもりだったら、こわさなんかは問題でなくなる。おぼけが現れなかったら、君はきつとシツポウするにちがいない。その場合でも、君が友だちとはぐれて、ひとりぼっちになったとたん、こわさは、急にもくもくと、こころの中にわきあがるだろう。

ここまで考えてくれば、君は、こわさというものが、なにか、人間が生きていく上で、非常に大きな役割をはたしていることに気がついたにちがいない。そして、こわさという感情には、それと反対の力で、それを消そうとするこころの作用があることもわかったらう。

つまり、こわさを感じさせる条件が、ぼくたちのまわりにあるし、また、そのこわさを消そうという条件もある。それが組み合わさって、こわさが増したり減ったりしているのだ。

(なだいなだ『心の底をのぞいたら』より)

問一、——部①「ゆうれいの正体みたり枯尾花」ということわざは、この段落のどのような内容を説明するために使われていますか、次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

- ア、ゆうれいは夜に出て、正体は枯れすぎなので、ゆうれいなどはそんなものだと馬鹿にすることを説明するため。
 イ、ゆうれいの正体は昼間見たら枯れすぎだったということを証明し、枯れすぎだったことを発見した喜びを説明するため。
 ウ、ゆうれいはなぜ夜にだけ出るのかを説明して、枯れすぎだったことを証明して残念だった思いを説明するため。
 エ、ゆうれいだと思っていたものが、昼間に出て正体がわかってしまい、こわくないということを説明するため。

問二、——部②「光と文明とは似かよったところがある」とありますが、どのような点で「光」と「文明」は似かよっているのか、説明しなさい。

問六、——部⑥「信頼のできる人間の身近な存在が、こわさと反対の作用を持っている」とは、どのようなことですか、その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、答えなさい。

- ア、両親など自分のよく見知った存在がそばにいてくれると、こわさが少なくなるという作用をおよぼすということ。
 イ、両親だけが信頼のおける存在なので、信頼感のおける両親という存在だけが人間にはこわさを少なくする存在であるということ。
 ウ、行ったことがない土地はこわいことが多く、反対に行ったことがある土地はこわさが少ないということ。
 エ、こわさに向き合った時に、元氣や勇氣をくれるのがよく見知った両親の存在であり、両親がいない所ではこわさが増すこと。

問七、——部⑦の「こわさというもの」とはどういうものですか、「身近な存在」「ひとりぼっち」という本文中の言葉を必ず使って四十字以内で説明しなさい（句読点ふくむ）。

問八、——部⑧「こわさを感じさせる条件」と「こわさを消そうという条件」にあてはまるものを次の中から選んで、それぞれの解答らんに分けて答えなさい。

- ア、おばけ
 ウ、文明
 オ、自分の知っていること
 キ、友だち
 ケ、近所のおじさん

- イ、暗闇
 エ、ひとりぼっち
 カ、自分の知らないこと
 ク、誰だかわからない人
 コ、お父さん

問三、——部③「昔の迷信ぶかい人たちの、闇を怖れたその度合は、今の人間とくらべて、ずっと大きかったにちがいない。」とありますが、なぜ今よりも昔の人の方が恐怖の度合が大きかったのか、次の中から最もあてはまるものを一つ選び、答えなさい。

- ア、昔の人は迷信ぶかい人が多く、迷信を信じていたため、迷信に出てくるおばけの話がとてもこわかったから。
 イ、昔の人たちの方が、文明の発展した今よりもわからないことが多く、その分闇がこわく感じられたから。
 ウ、闇は、今よりもずっと深く、暗く、電灯などがまだ広まっていなかった昔の方が、周りが暗くておばけが出やすかったから。
 エ、今の人間は、おばけなどはいないということがわかっているが、迷信ぶかい昔の人はおばけがいることを予知できたから。

問四、——部④「こわいから、おばけが出る」とはどういうことですか、その説明として、わかりやすく表現されている箇所を「〜ということ」という文末につながる形で本文中から十八文字（句読点ふくむ）で抜き出して答えなさい。

問五、⑤の中の文章の意味が通るように次の選択肢を並べかえなさい。

- ア、また、遠くから、だれかが歩いてくるすがたが見える。だれだかわからない。
 イ、その人がしだいに近づく、君のこわさも大きくなる。その人が、近所のおじさんだとわかると、急にこわさが少なくなる。
 ウ、ところが、急に変な風がさあっと吹いて、木の葉や草むらがざわめくと、こんどはギリとするだろう。
 エ、静かで、なにも起こりそうもないと、君は自分のところが、すこし落ち着いてくるのを感じる。

問九、⑤部「あまり」と同じはたらきをしている言葉を次の中から一つ選び、答えなさい。

- ア、しかし イ、あまく ウ、けっして エ、あらゆる

問十、⑤部 a、b、c、d のカタカナを漢字に直しなさい。

- a、チャクリク b、ゲンショウ c、カコまれ d、シツボウ

二〇一五(平成二七)年度 中学校 第一回入学試験解答用紙 国語(五〇分)

一
二

問一

点

問一

点

問二

点

問二

点

問三

点

問三

点

問四

点

問四

点

問五

点

問五

点

問六

↓

↓

↓

点

問六

↓

↓

↓

点

問七

点

問七

点

問八

点

問八

点

問九

点

問九

点

問十

点

問十

点

問十一

点

問十一

点

受験番号

氏 名

合計点数

14.法政大.①